
フェイト / stay room

魔法少女リリカルなのはA's
ユーノ×フェイト 18禁小説本

PARALLEL ACT

フエイト / stay room

目次

第1章	5
第2章	8
第3章	14
あとがき	21

フェレットの雌は交尾しないと死んでしまう。そしてユーノと…

あらすじ

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

フェイトにロストロギア探索任務が下る。場所は第九七管理外世界。

2

フェイトはロストロギアの方でフェレット化。なのはの家に居候する。

第1章

1

「フェイト、君の最初の任務だ」

そう言つて、クロノはフェイトの前にパネルを展開した。

そのパネルには、今回の任務の概要、ロストロギアの反応パターンや、反応があつた世界について表示されている。

「ロストロギアの回収任務。特に難しいことはない」

「クロノ、ここつて…」

「そうだ。第九七管理外世界、地球。なのは達が居る場所だ」

フェイトの顔がパアツと明るくなる。

「本当に!？」

「ああ。偶然この世界にロストロギアの反応が現れてね。確保しておいた。君も早くなのはに会いたいだろう?」

フェイトは囑託魔導師の試験に見事合格。程なく裁判でも無罪の判決が出た。それを受けて、正式に管理局で働く

ことになり、クロノが直接の上司となった。最初は研修や訓練が続き、ついに初めての出勤任務が下つた。それが、「第九七管理外世界でロストロギアの反応があり、それを速やかに回収すること」だった。

「第九七管理外世界に着いたら、現地の民間協力者と合流、合同でロストロギアの回収に当たってくれ」

「はい」

クロノからの、お祝いだった。

2

フェイトは転送装置の中に入る。そこから、少し離れた所にクロノとエイミイがいて、操作パネルを彼女が忙しく操作している。

「では最後に確認するが、第九七管理外世界に転送後、まず現地の民間協力者との合流地点に向かつてくれ。そこで彼女にデータを渡した後、ロストロギアの探索だ」

「はい」

「まあ、ぶつちゃけ」なのはちゃんと一緒にロストロギア探してね」って事だから」

フェイトの顔が緩む。嬉しさを隠しきれない。

「エイミイ、そう言う言い方はだな」

「まあ、いいじゃない。ロストロギアって言っても、今度のは大したこと無いんだし。クロノ君も、フェイトちゃんかなのはちゃんに会う口実を作るためにこの仕事取ってきたんでしょ」

「そうなの？」

「そ、そんな事はない。僕は純粹にだな……」

口ではそう言っているが、赤くなった顔を背けているのでバレバレだ。

「じゃあ、今から転送するから。準備いい？」

「いつでも」

エイミイは、一通りクロノをからかい終わった頃、転送の準備が出来たのを告げる。

「それじゃ、転送！」

フェイトの姿が装置から消えた。

3

第九七管理外世界、すなわち地球にフェイトとアルフが現れた。場所は海鳴市の外れ。万が一誰かに見られないように、山の中に転送された。

「それじゃ、合流地点に向かおうか」

「うん。あ……」

「どうしたの？」

「ロストロギアの反応が……」

フェイトとアルフはロストロギアの気配を入念に探す。合流予定地点よりも遙かに近い。

「クロノ、エイミイ、ロストロギア発見。今から回収に向かう」

「合流しなくて大丈夫か？」

「うん、遠回りになるし、なのはには位置を教えて」

「分かった。無理はするなよ。危険だと判断したら、なのはが来るのを待つんだ」

「分かった」

フェイト達はロストロギアのあると思われる地点に向かった。

「見つけた。あれだ!!」

フェイト達が飛行する先に高エネルギー体が見えて来た。

「ちよつと、エネルギーレベル高過ぎない？」

「うん、でも考えられる範囲だよ」

フェイト達は高エネルギー体に近づくと、そのまま浮遊して様子を見る。

「安定してるみたい。今なら、回収できるかな？」

そう言って、フェイトは距離を縮める。

「大丈夫？　なのはを待った方が良くない？」

「大丈夫そだよ。これなら、私達だけで……」

そう言って、フェイトがロストロギアに手を伸ばした瞬間、それが激しく光り、火花を散らし始めた。

「危ない！　フェイト逃げて!!」

アルフが叫ぶ。フェイトも待避行動をしようとするが、間に合わない。

「きゃあああっ!!」

視界が真っ白になると同時に、意識も真っ白になった。

第2章

1

暗い。真っ暗。頭痛い。身体痛い。なんか怠^{だる}い。どこどこ？

フェイトはゆつくりと瞼^{まぶた}を開ける。明るくなった。でも視界はぼやけている。まだ頭もはつきりしない。

「あ、目が開いた。良かったあ」

聞き覚えのある少女の声がある。その少女が自分に顔を近づける。

あ、なのはだ。なのは、来てくれたんだ。久しぶり、なのは。会いたかったよ。

「もう、全然動かないから死んでるのかと思ったよ」

そんな、死ぬだなんて大げさな。私は大丈夫…… あれ、声が出ない。

「でも、もう安心だね」

そう言っつて、なのははフェイトの身体をさする。なのは

の大きくて温かい手が、フェイトをゆったりとした心地にさせる。

(あれ?)

なのはの手は自分と同じくらいの大きさの筈。自分の肩や腰を丸ごと覆うくらい大きな筈がない。それにさつきから声が出ない。フェイトはゆつくりと身体を動かす。何かおかしい。重心の位置と言うか、身体のバランス、自分の身体と身体が擦れる場所が普段と違う。

立てない。

フェイトは起き上がるうとしても起きられない。四つん這いにしかならない。おかしい。ふと自分の手を見て、異変に気づいた。自分の手じゃない。動物の手だ。

(あれ? 何これ? 何この手!?)

不自由な身体を引きずって、ヘッドから下りようとする。何か確認する手段が欲しい。そう、例えば鏡とか。

「あ、駄目だよ。動いちや。怪我してるんだから安静にしとかないと」

そう言っつて、なのはが自分の身体を軽々と持ち上げた。同じ体格の筈のなのはが、自分の身体を簡単に持ち上げられる筈がない。フェイトは青ざめて顔を振ると、横に姿見を見つめる。それに映った二人の姿を見て、ショックで再び意識を失った。その鏡には、一人と一匹、フェレットを

抱き抱えたなのは姿が映っていた。

2

目が覚めたフェイトは自分の手を見る。まだ「手」ではなく「前足」だった。信じたくはないが、これが現実だと受け入れるしかない。

痛みが大分引き、身体が軽くなっている。通常、こんなに早く治る筈がない。なのはが治癒魔法を使ってくれたんだろう。

身体を持ち上げて辺りを見渡していると、なのはが気づき、「あ、起きた？」と言いながら近寄ってきた。

「もう傷治ったんだ。やっぱりユーノ君の治癒魔法は効くね」

治癒魔法をかけたのがなのはではなくユーノだと知って、フェイトは少し残念に思った。

(う…)

フェイトは段々と尿意を感じてきた。最後にしてから何時間も経つ。フェレットになったからと言って、尿意が消えるわけではない。フェイトがそわそわしていると、その

様子になのはが気がついた。

「どうしたの？ あ、おしっこか」

そう言っただけなのはがフェイトを抱えると、部屋の隅に連れて行く。

「はい、これがトイレだよ。ここでおしっこしてね」

「!?」

「ここで!? ここ、部屋の中だよ!! それにこれって、砂トイレ? これにするの!? そんな!」

「まだ慣れないだろうけど、ちゃんとした所でおしっこできないと、家には置いておけないんだよ」

フェイトはふるふると首を振って拒否する。

「しょうがないなあ、ユーノ君、やって見せて」

(ユーノ!?)

「全く、しょうがないなあ」

ユーノは口では嫌がりながらも、部屋の隅に置いてあるフェレット用のトイレで用を足す。全く怯むことなく日常的にやっている行動の様だ。

(ユーノ……)

フェイトは、ユーノが人間の尊厳をすっかり失ってしまった事、に哀れみを感じた。

「さ、次は君の番だよ」

なのはがにこやかに微笑む。しかし、それにつられてこ

ここで用を足すわけにはいかない。

フェイトは走り出して、なのはの横を抜け、ドアから外に出る。

「あっ！ 出ちゃ駄目だったば！」

なのはが追いかけてくるが、構わず逃げる。そして階段を駆け下りる。低い目線で、高速で階段を駆け下りると、風景が凄い勢いで飛んでいくが、怖がってはられない。それに高々度からの急降下は何度もやっている。階段を下りきり、トイレを見つけると、そのドアを叩く。流石にこのドアは開けられない。

「トイレ？」

追いついたなのはがドアを開けると、フェイトは急いで中に入った。そのままジャンプして、洋便器の上に乗っかる。そして、用を足し始めた。

（恥ずかしい!!）

他人に排泄をしている所を見られるなんて、恥ずかしさの極み。もし人間だったら全身真っ赤になっている所だが、体毛に覆われているために分からない。それでも、ここでちゃんと人間のトイレを使える所を見せないと、砂トイレを義務化されてしまう。フェイトなのはに自分の排泄シーンを見せる必要があった。

「あゝ、ちゃんとトイレで出来るんだ。じゃあ、無理に砂

トイレでさせる必要ないかな」

「そんな！ 僕には無理矢理躡けたのに！」

「男の子と女の子は違うよ」

「フェレットにそんな区別無いよ！ それに僕は元々人間……」

なのはとユーノのやりとりを聞きながら、フェイトは砂トイレを免れた事まぬがにホッとす。

ズルッ！

安心して気が抜けた所為でバランスが狂った。後ろ足が便器に落ち、前足で必死に便座に捕まる。ここで落ちたら、せつかくの砂トイレ免除が無効になってしまう。なにより、便器の中にはまだ流していない自分の尿が溜まっている。しかし、その抵抗が達成される事はなかった。

「しょうがないなあ」

なのはは、フェイトの首を掴んで流されないようにし、レバーを回す。新鮮な水が尿に濡れたフェイトの毛皮を洗い流す。

「やっぱり、人間のトイレ禁止ね」

そう言っ、なのははフェイトを摘み上げると、反対側の手でタオルを持ち、その上に載せた。フェイトはトイレに落ちたショックで放心している。滴しずくが零こぼれないように注

意しながら、お風呂場に向かう。簡単には流したが、やはりちゃんと洗わないと不潔だ。

なのはは、フェイトを風呂場に放り込むと、腕を捲り上げた。洗面器にお湯をはり、フェイトを入れるとシャンプーを浴びせた。

「もう傷は治ってるから、染みないよね?」

と、シャンプーを泡立てながら言った。なのはの手の感触が気持ち良い。トイレに落ちて、自分の尿まみれになったシヨックを癒やしてくれる。

「お父さん、お母さんに許可貰わないといけないから、ちゃんと綺麗にしとかないとね」

士郎と桃子の許可は、一匹目という事もあり、すんなりと通った。

「良かったね…… え〜っと、まだ名前決めてなかったね。なんて呼ぼうか」

なんて呼ぼうかも何も、自分には「フェイト」と言う名前がある。しかし、喋れないフェイトにはそれを伝える事が出来ない。

「そうだ! ナナちゃんにしよう!」
「がっくし。」

フェイトは項垂れる。なのはの友達に「フェイトがいる」以上、同じ名前を付けられる訳ないのだが、やはり落ち込む。それにしても、どうして「ナナ」なんだろう?

「はい、ナナちゃん。ご飯だよ」

そう言っただけで出された食事を見て、フェイトは引き攣る。ペレット状の物がこんもりと積まれた餌入れ、いわゆるフェレットフードだ。

(ご、ご、ご、これ……)

「今まで食べてたのと違つかもしれないけど、栄養あるんだよ」

なのはは、純粹無垢に笑って、フェイトが食べるのを待っている。とても文句は言えない。いや、言おうとしても言えないが。

フェイトはなのはの目を直視できずに、顔を逸らす。そこで、信じられない光景を目にした。ユーノがフェレットフードを食べている。

(ユーノ…… 君って……)

フェイトは、観念してフェレットフードに口を付け、また一つ人間の誇りを棄てた。なお、味は結構美味しかった。

「それじゃあ、行ってくるね、ユーノ君、ナナちゃん」
翌日、なのはが学校に行くのを見送るユーノとフェイトの二匹。頑張って手を振っている。

部屋のドアから見送った後、窓枠によじ登り、さらに見送る。そして、なのは姿が完全に見えなくなった。

「さてと……」

ユーノが人間の姿に戻って、背筋を伸ばしている。フェイトはそれを羨ましく眺める。早く自分も人間の姿に戻りたい。

「さて、いつものやろうかな」

そう言つて、ユーノはなのはのタンス、それも下着が入っている引き出しを開けた。そこにはカラフルな下着が詰まっている。

(!? ユーノ何を……!?)

フェイトはびっくりしてユーノを見る。

「そうれっ!」

ユーノは引き出しに向けてジャンプした。その途中でフェレットの姿になり、そのまま引き出しの下着の山にダイブする。絶妙なタイミングと位置、かなり慣れている。

「ぶはあ! やっぱ良いなあ。たまらないよ」

ユーノはなのはの下着の海の中を掻き分けて進む。ある意味男の桃源郷だ。

(な、な、な! ユーノ何やってるの!?)

フェイトは叫ぶが、当然ユーノには通じない。ユーノがこんな変態だった事に、驚き、呆れ、そしてなのはの友達として、同じ女として怒りが湧いてくる。

フェイトも引き出しの中に飛び込んで、ユーノに近づく。

「お、お前もなのはのパンツの中で泳ぎたいの……」

ガリツ!!

フェイトは爪でユーノの顔を引っ掻いた。

「何するんだ! こいつ!!」

フェレット同士の喧嘩が始まった。動きづらいパンツの海の中で、お互いを引っ掻き合う。

「ただいま! ちゃんとお留守番してた?」

夕方、なのはが帰ってきた。今日は新入りのナナの事が心配で、すずかやアリサ達との寄り道もせず、真っ直ぐに帰ってきたのだ。

ユーノとフェイトの顔を覗くと、引っ掻き傷が沢山ある。

「あ、喧嘩したな。駄目だぞ、喧嘩しちゃ。特にユーノ君は先輩なんだから色々教えてあげないと」

そう言って、ユーノの額を軽く指で弾き、フェイトの頭を撫でる。フェイトはユーノがその程度で許されているのが不満でならない。

「さてと、着替えなくっちゃ」

なのはが箆笥の引き出しを開ける。制服を着替えるだけなので、残念ながら下着が入っている引き出しは開けない。フェイトは、箆笥まで走ると、下着が入っている引き出しをノックした。

「え？　ここ開けて欲しいの？」

なのはは、フェイトの動作を不思議に思いながらも、下着の引き出しを開けてみる。そこには、なのはの下着が整然と並んでいた。ユーノは、なのはの下着を堪能した後、ちゃんと下着を仕舞い直していた。でないとはばれてしまうからだ。

フェイトは引き出しの枠に乗つたかると、前足をユーノの方に向ける。次に、前足を大きく円を描くように動かし、身体毎引き出しの中に倒れた。

「？」

なのはは、その様子を不思議がる。全く意味が理解できないようだ。それは仕方のないことで、真面目で通っている親友のユーノが、なのはのいない隙に自分の下着に囲ま

れて「うはうは」しているなんて、想像できない方がむしろ自然だ。

フェイトは証拠を探そうと、辺りを見る。そして、自分のではないユーノの毛を見つけると、それを指さした。前足で、だけど。

「しょうがないなあ、ナナは」

いつの間にか人間の姿になっていたユーノが、フェイトを掴み上げる。フェイトは驚いて振り向く。

「駄目じゃないか、なのはの下着で遊ぶなんて。毛が落ちちゃったじゃないか」

「あ、本当だ。洗い直さないと……」

(それ、私の毛じゃないのに)

なのはは、ユーノの毛をフェイトの毛だと勘違いしたようだ。ユーノの毛とフェイトの毛は僅かな違いでしかない。それに、「フェイトは引き出しの中に飛び込んだ」が「ユーノは引き出しの中に入っていない」フェイトの毛だと勘違いするのも無理からぬ事だった。

「駄目だぞ、ナナ。こんな事しっちゃあ……」

(い、痛いっ！)

フェイトを掴み上げているユーノの手に力が入る。フェイト同士では体格は互角だが、人間形態では勝ち目がない。自分とユーノとの力関係を思い知らされた瞬間だった。

第3章

1

「ただいま。ナナちゃん、ちゃんとお留守番出来た？」

（おかえり、なのは）

部屋になのは、とユーノが帰って来たのを、フェイトが出迎える。もちろん言葉は通じない。なのはが、疲れた顔でフェイトの頭を撫でる。

「今日もフェイトちゃん見つからなかったよ……」

なのはは、フェイトが行方不明になってから、毎日探索に出ている。疲労が見て取れる。しかし、どれだけ探してもフェイトは見つからない。それもその筈、フェイトはここにいるのだから。

（なのは、私はここにいますよ）

そう思いつつ、フェイトは自分の頬でなのはの頬をさする。

フェイトは、自分の所為でなのはを苦しめているのが無

性に哀しかった。せめて自分がフェイトだと伝えることが出来たら、遅くまで探索に行く必要もないのに。

（なのは……）

どうにか自分がフェイトだと言つことを伝えることは出来ないか？ そう思って身体を上げる。

くらっ……

（あ、あれ？）

ふとめまいがする。頭が回る。フェイトはそのまま意識を失って倒れた。

2

「フェレットつて、そんなだったんだ……」

翌日、動物病院でフェイトを診せて来たなのはは、眠るフェイトを眺める。

フェレットの雌は、発情した後交尾をしないとホルモンバランスが崩れて、再生不良性貧血になって死んでしまう。衝撃だった。昆虫というレベルでなく、より人間に近い哺乳類での交尾。しかもそれをしないと死んでしまうなんて。

「ユーノ君、知ってた？」

「いや、僕は人間だし」

「そっか、そうだったよね」

すっかり忘れていたが、ユーノは人間で、フェレットは変身しているに過ぎない。まして性別も違う。仮に同じだったとしても、身体の内部的変化なんて知るよしもない。人間だって、医者でもなければ自分の身体の事なんて分からないのに。

「どうしよう……」

野生ならそんな事はないんだろうが、人間に飼われて、異性と接触出来ない動物の悲劇か。早急に相手を見つけなないと、ナナが死んでしまう。悩んでいると、フェイトが目を見ました。

「ナナちゃん。このままじゃ、ナナちゃん死んじゃうんだって」

（え？ 死ぬ？）

フェイトは耳を疑った。いきなり自分が死ぬと言われても、対応できるわけがない。

「フェレットの雌が、交尾しないと死んじゃうなんて知らなかったよ……」

（え？ え？ え？ 交尾!? しないと死ぬ？）

交尾とは、人間で言えばセックスである。それをしないと死んでしまうなんて、人間では考えられない。

「どうしよう？ 急いでお嬢さん見つけないとナナちゃんが死んじゃう。でも、お嬢さんなんてどこにいるんだろうっ？」

なのはは、近所にフェレットを飼っている家なんて知らない。

「動物病院とか、ペットショップに行けば紹介して貰えるんじゃないか？」

「そっかあ、そうすれば雄のフェレットを飼っている人を紹介して貰えるかも……」

そこまで言った所で、なのははある事に気づいた。

「いた……」

「何が？」

「雄のフェレット……」

そう言っつて、なのははユーノをじっと見る。ユーノが冷や汗を垂らす。

「ま、待て!! 相手は動物だぞ!! 僕にそんな趣味はない!!」

「ユーノ君も動物じゃない」

確かに見た目は動物だ。そんな姿で主張されても説得力は無い。

「このままじゃ、ナナちゃん死んじゃうんだよ！ ユーノ君はそれで良いの!？」

「う……」

そう言われると弱い。自分の所為で命が一つ消えるなんて、後味が悪すぎる。それになのはの悲しむ顔は見たく

ない。

「し、仕方ないな……」

「うん♡」

なのはが満面の笑みを浮かべる。変わりに青ざめたのがフェイトだ。このままでは自分はユーノと交尾、いやセックスをすることになる。もちろん初めてだ。初めての相手が動物で、しかも自分も動物の姿の時なんて、嫌過ぎる。キスだってしたこと無いし、初めては大好きな人に、ムードある部屋で上げたい。

「なあ、本当に交尾しなくても、道具とか指とか使えば、擬似的に交尾状態になるんじゃないか？」

「それじゃ可哀想だよ。初めてが道具なんて」

「それもそうか」

(納得しなくていい！ でも道具も嫌!!)

フェイトはその場から逃げようとする。しかし、弱った身体は、簡単に捕まってしまうた。なのはに押さえつけられて、身動きとれない。背後からユーノが迫ってくる。

「なのは、僕も初めてなんだけど、ちゃんと出来るかな？」

「フェイト、だよ」

(い、嫌…… 助けて……)

恐怖でフェイトの身体がガタガタ震える。ユーノの前足がフェイトの腰を掴む。

「……駄目だ」

「どうしたの？」

「やっぱり動物相手じゃ勃たないよ」

(ほっ……)

フェイトはそれを聞いて安心する。ユーノにはまだ正常な感覚が残っていたようだ。これで初めてが動物という事態は回避された。

「だからなのは、脱いで」

「え？」

「なのはが裸になれば、動物相手でも勃つよ」

「うん」

ユーノとは何度もお風呂に入ったことある。その時は全然気にしなかったが、「勃たせる為に脱いで」と言われると抵抗ある。

「じゃあ、私がユーノ君のおちんちん触るってのはどうかな？」

「えっ!？」

(えっ!?)

その科白に、ユーノもフェイトも驚く。

「ほら、手を離すと逃げちゃうし、おちんちんって、触ると大きくなるんですよ」

「……」

なのはの大胆な発言に、沈黙が生まれる。

(ひっ!?)

「あ……」

が、その状況は簡単に打破された。フェイトの股間に何か硬くて温かい物が当たる。

「ごめん、なのは。なんか想像したら勃っちゃったよ」

「もう、ユーノ君ったら」

なのはとユーノは和やかだが、フェイトだけは別だ。処女喪失のステップが再び進行するからだ。人間だったら冷や汗がだらだら出ていることだろう。

「じゃ、行くよ」

ユーノの前足に力が入る。フェイトの必死に足掻くも、なのはに押さえつけられて無駄に終わる。

ぐっ!

(ひっ! っ! っ! 痛っ!!)

ユーノのペニスが、フェイトの膣口をこじ開け、奥に進む。乾いたペニスと膣口が擦れる。

フェイトは、自分の股に異物を無理矢理入れられ、腹が裂ける様な痛みを必死に堪える。体中が痙攣する。

「ああっ、こんななんだ…… 凄い」

「どんな感じなの?」

「暖かい。ナナの体温が僕のを包んでる。冬に温めたタオ

ルで包んだら、こんな感じになるのかな?」

「へえ、そうなんだ」

激痛を必死に堪えている最中、和やかに談笑しているユーノとなのはが恨めしい。だが、ユーノが動いていないのがせめてもの救いだ。

「じゃあ、ちよつと動かしてみようかな」

そう言つて、ユーノは少しペニスを引き抜くと、再び突き刺した。それを何度か繰り返した後、今度は奥の限界を試すように深く埋め込んだり、円を描くように回したりする。

(痛い! 痛い! 痛い! 止めて、動かないで……!)

フェイトは身体の底をかき混ぜられる痛みから悲鳴を上げるが、当然二人には理解できない。ペニスの動きは、治まるどころかさらに激しさを増す。

「ああっ! 凄い、気持ち良いよ」

「へえ、やっぱり気持ち良いんだ」

心なしか、なのはの頬が赤い。股間も、少しもじもじさせている。

「ああっ!」

不意にユーノの動きが止まる。ペニスを奥に押し込んだまま動かない。顔は、筋肉が弛みきつている。

「精子出たの?」

「うん…… 凄い、気持ち良いよ」

ユーノは、息を吐きながら、ペニスを引き抜く。ペニスの表面にぬっとりまとわり付いた液体が光っている。フェイトの膣穴からも、白い液体が零れる。

「良かったね、ナナちゃん。これで死ななくて済むよ」

(死にたい……)

にこやかなのはに反して、フェイトは沈みきっている。自分の初めてがフェレットの姿で、相手もフェレットで、しかもなのはに見られながらだったのだ。

「でも、一度で良いのかな？」

「どういう事？」

「病気になるくらい何だから、何度もしないといけないんじゃない？」

「そっか、そっかもね」

快感に味を占めたのか、ユーノが積極的になった。フェイトにとってはたまった物ではないが。

ビキイッ!!

(い、痛っ!!)

フェイトの身体に激痛が走る。今度は破瓜の痛みではない。全身の関節が軋む。

手足が少し伸びる。身体が発光し出す。胸が太くなる。体毛が薄くなる。尾が短くなる。髪が伸びる。

なのはとユーノが驚きの余り呆けていると、みるみる内

にナナがフェレットの姿を失い、人間の姿に変わっていった。そして、身体を横たえ、髪を乱し、股間から白い液体を垂らしているフェイトが現れた。

「う……あ……」

「フェ、フェイト…… ちゃん？」

フェイトが薄めを開くと、視界に入ったのは肌色だった。段々とその色がくつきりとしてくると、人間の手だと認識出来てきた。さらに、その視界による手の在る位置と、感覚による自分の手が在る位置が一致する。試しに指を動かして見ると、視界にある手も動いた。これは自分の手だ。間違いない。

「私…… 人間…… 戻った……」

嬉しくて、感情が高ぶる。目から涙が溢れ出し、目の前が再び見えなくなった。

「フェイトちゃん!」

なのははフェイトに駆け寄る。

「まさか、ナナちゃんがフェイトちゃんだったなんて……」

「なのは……」

「今まで、気づかなくてごめんね……」

「なのは瞳にも、涙が溢れる。」

「いいよ、気にしないで。気づく方が不思議なんだから……」

「でも…… 私、フェイトちゃんに酷いことしたし」

「そんな、酷いことだなんて」

「だって、フェイトちゃんに砂でおしっこさせたり……」

「フェ、フェレットだったんだから仕方ないよ……」

フェレットとしての日常の一部となり、忘れていた羞恥心が再び甦よみがえってくる。

「フェレットフード食べさせたりしたし……」

「フェ、フェレットの身体に人間の食事だと、身体に悪いから……」

段々と、人間に戻った感動が打ち消されてきた。

「いや〜良かったよ、フェイトが見つかった。じゃあ、僕は監理局に報告に行くから」

そう言っつて、ユーノはこの場から去ろうとする。
はっ！

なのははユーノに振り向き、フェイトは手で自分の身体を隠す。暫く沈黙が流れる。

「ユーノ君、フェイトちゃんとセックスしたよね……」

「……」

フェイトの顔が青ざめる。

「フェイトちゃん、初めてだったんだよね……?」

フェイトはこくりと頷く。

「それに、中に出したよね……」

「……」

フェイトは、「ああっ!」っと言っつて、手で顔を隠して泣き始めた。

「もしフェイトちゃんが妊娠したらどうするの!?!」

「そんな、『セックスしろ』っつ言ったのはなのはじゃないか!!」

「私は『ナナちゃんとして』っつ言ったの! 『フェイトちゃんとして』っつなんて言っつてない!!」

「そんな無茶な!」

「フェレットと人間がセックスして、変な子供になったらどうするの!?!」

「した時はフェレット同士だったじゃないか」

「じゃあ、フェイトちゃんがフェレットの子供を産むっつて言っつもの!?!」

二人の言い争いは続く。フェイトに精神攻撃を与えながら……

あとがき

昏々たるじぎげんちん。PARALLEL ACT 主催者 TomOne
です。

取り合えず、軽めのエチィ本です。フェレットモードの
ユーノと、フェレットに変わってしまったフェイトの交尾本
です。「交尾なら18禁表示要らなくね」とも思いましたが、
念の為に付けています。

今回、フェレットになってしまったフェイトが書きたかつ
たんで、それ中心です。で、フェレットについて調べてい
ると、「フェレットの雌は発情後、交尾しないと死んでし
まう」と言う何ともエロ本向きの情報があったんで、使い
ました。

それ以外は結構御座なりです。自分でも書きながら、「そ
ういやアルフどこ行った?」とか思いましたが、ぶっちゃ
け話の流れに不要なので、途中からいなくなってます。存

在も忘れられてます。プロットにもいなかったし。

なのはの獣姦本は幾つかありますが、片方は人間の物ば
かりです。獣×獣はおそろく、これが初めてでしょう。あ、
ザフィーラ×アルフはあるかも……って、無いよなあ。

漫画にするなら、動物同士の交尾ですが、小説でならば
人間タイプのユーノと人間タイプのフェイトとの性交と区
別つかないなあ、とか言う実験も兼ねてます。あなたはど
ちらがお好みですか？

タイトル、最初“Fate / stay room”にでもしようと思っ
たんですが、あんまりなので今のにしました。

次は、秋のオンリーに新刊を出したいです。ただ、少し
ペース落したいので、冬に新刊になるかも……

とにかく、年内に一冊は出しますので、その時はまたよ
ろしくお願いします。それでは。

’07年8月15日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』の同人誌を発表する。

フェイト / stay room

PARALLEL ACT SERIES

2007年 8月19日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>

E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

